

アカデミック・ジャパニーズ教育研究は何を目指すのか —これまでの研究から—

堀井恵子

要旨

アカデミック・ジャパニーズ（以下、AJ）について、これまでの先行研究を検討した結果、留学生を対象とした、講義を聞く・文献を読む・レポートを書く・発表をするなどのスキルを中心とする狭義の捉え方と日本人学生も含めた言葉の教育とする広義の捉え方が並行してあることがわかった。AJ 研究黎明期には理念を提起する広義の AJ 研究が主であったが、その後の CiNii や AJ ジャーナルに掲載されている AJ 研究は狭義のものがほとんどであった。一方、調査から AJ の核心が論理的思考・批判的思考を用いた問題発見解決能力であることを浮き彫りにし、ゼミにおける AJ 教育実践における学習者の振り返り記述の分析結果からそれ等が涵養される可能性を明らかにし、また、大学における AJ 教育のアーティキュレーションの必要性を論じる研究もある。AJ の理念構築のためには、狭義の AJ 教育だけでなく、広義の AJ 教育の可能性を検討し、AJ 教育とその研究が何を旨とするのかを探るさらなる実践研究が期待される。

キーワード

アカデミック・ジャパニーズ、理念・意義、先行研究、狭義・広義、アーティキュレーション

1. 研究背景・目的

2024 年 4 月に施行される「日本語教育の適正かつ確実な実施を図るための日本語教育機関の認定等に関する法律」⁽¹⁾に伴う資料「留学のための課程を置く認定日本語教育機関の認定等について」⁽²⁾（以下、「資料」）には認定に定められた最低授業時数を減ずることができる科目として、「大学又は専門学校である認定日本語教育機関が開設するアカデミック・ジャパニーズの修得に資する科目など、履修することにより学部や学科での学修における日本語の言語運用能力の涵養に繋がる内容の科目（学部等の基礎科目、初年次教養科目等）であること」が挙げられているが（p. 29）、ここでいう、アカデミック・ジャパニーズ（以下、AJ）とその修得に資する科目（以下、「AJ 科目」）とは具体的に何に相当するのだろうかと疑問を持った。

アカデミック・ジャパニーズ・グループ（以下、AJG）研究会の規約、第 2 条⁽³⁾には、

本研究会は、「アカデミック・ジャパニーズ（大学・大学院などの高等教育機関での学習・研究に必要な日本語力）」の理念の構築と教育方法論の研究を行い、それに基づいて教育内容体系・教材例・教育方法例を提起することによって、大学等での日本語教育・日本語表現教育および大学入学前の日本語予備教育の質的向上に貢献することを目的とする。

とある。AJ が生まれて 20 年余、AJ 教育は日本語教育研究における一分野となっているが、理念の構築は進んでいるのだろうか。これまでの AJ に関する先行研究を検討し、AJ 教育の理念と AJ 教育が何を目指すことができるかを再考することは意義があるのではないだろうか。

2. AJ の先行研究

AJ の先行研究について、その理念に関するものを、2.1 で 2002 年から 2006 年までの AJ 研究黎明期の研究について、2.2 で 2013 年の木下他によるパネルセッションについて、そして、2.3 で 2024 年 1 月 20 日現在「国立情報学研究所学術情報ナビゲータ」(以下、CiNii) における AJ をキーワードとする論文 303⁽⁴⁾を概観後の 2020 年以降の研究について、それぞれ紙幅の許す範囲でまとめる。

2.1 AJ の誕生と科研グループによる研究 (2002-2006)

AJ は、2002 年に日本への留学を希望する外国人の学力を測る新たな試験として日本留学試験 (EJU)⁽⁵⁾が実施された折、その日本語試験の「日本語シラバス」の「試験の目的」に、「外国人留学生として日本の高等教育機関、特に大学学部留学を希望する者が、日本の大学での勉学に対応できる日本語力 (アカデミック・ジャパニーズ) をどの程度習得しているかをシングルスケールで測定することを目的とする」と示されたことから関心を集めた。門倉 (2001) は、「これまで日本語教育界で、どのような日本語能力が『アカデミック・ジャパニーズ』なのかについて真剣に議論されてきたとは、とても言えないだろう。そうした議論の裏付けもないままに、アカデミック・ジャパニーズということばが新試験のキーワードとして一人歩きしてしまっている。」(p. 101) と指摘し、AJ についての研究の必要性を述べている。門倉を代表とした 2003 年と 2005 年の科学研究費研究成果報告書 (以下、科研報告書) は、初めて AJ 研究をまとめた文献として、日本語母語話者を含めた「日本の大学での勉学に対応できる日本語力」を問うことで、大学教育における言語教育としての AJ の果たす役割を検討している。また、大学教育の意味や、教育目標の根本的な捉えなおしも促している。そこでは、大学における学びで必要とされる論理的思考・批判的思考、そして問題発見解決能力の育成は日本語予備教育、または、国語教育ではあまり行われてきていないことが指摘され、更に、日本語母語話者を含め、中等教育までの多くの時間が受験対応に割かれている場合も少なくない学習者にとって、正解が 1 つではない、アクティブラーニングへの転換期教育ともなる AJ を身につけることは、大学での学習のみならず、卒業後の社会人となったときにも意味を持つこと、AJ 教育実践に伴い、学習者・教員・教育機関にとって学習/教育のパラダイムシフトが必要となることが述べられている。門倉他 (2006) と合わせ、この AJ 研究黎明期には「ことばの教育のとらえなおし：コミュニケーション、学習について」といった AJ についての広範な理念の提起が行われたと考える。

その後、中等教育から大衆化した高等教育への転換期教育として必要となった初年次教育の日本語表現法や日本語リテラシー、そしてリメディアル教育などの中に AJ の要素が取り入れられ、日本語教師が教育実践を担当することも珍しくなくなった。どのように

AJ を行うかについての研究も盛んに行われた。しかし、理念を問う研究やその実践研究はほとんど見られなかった。

2.2 木下他（2013）のパネルセッション

木下他（2013）は、AJG 発足後 9 年がたちその間の社会の変化に応じて「AJ とは何か」を問い直す時期に来ているとして、「日本語学習者の多様化に伴い AJ も多様化し日本語教育の現場では AJ の実践報告や様々な教材開発が増えたが、日本語教育や言葉の教育における AJ の意義というものが議論されていないのが現状」（p. 59）と述べ、AJ 理念の広がりや意義、今後の進むべき AJ の方向性について議論することを目的にパネルセッションを開いた。パネリストの佐藤（2013）は、2000 年以降に発表された AJ をキーワードとする学会誌、研究会誌、各大学の紀要などを調査したが、「結局、AJ 概念は方向性として「一定の了解」を得つつあるものの、その外延は明確でない。」（p. 63）と述べ、AJ 議論のきっかけが日本留学試験であったため、AJ 研究には「AJ とは何か」という問題意識はあったが、「なぜ AJ という概念が必要なのか、それをを用いることにはどのような意味があるのか、考える必要があるのではないか。」（p. 64）と述べている。また、同じくパネリストの小笠（2013）は、インターネット上の文献検索を使って、AJ をタイトルに冠したり、キーワードとしてあげている論文 81 件を検索し、「それらの内訳は、研究発表の予稿集として発表された小論、紀要論文としてコースの説明をしているもの、教材分析、教材開発、AJ の定義や日本留学試験との関連性を説明した論文が多く、実践報告論文は 30 件であった」（p. 64）と、理念やその実践についての研究が少なかったことを述べている。AJ ジャーナル⁽⁶⁾についても「全体としてはスキルに関する報告が多いという感が否めない。（中略）より多くの『〈学び〉の教育』『市民の日本語』に関する報告が待たれる。」（p. 65）と述べている。一方、「AJ について言及されていないものでも、AJ と考えるべき内容のものが多くあることがわかる。」「『アカデミック』という言葉が一人歩きをして、『大学生のためのもの』『大学の授業を理解するためのもの』というイメージを作ってしまったからではないか。」「自律的な市民を育てる教育として、大学生以外の学習者を対象とした研究領域を持つ人たちにもともに実践を共有していく呼びかけをする必要があるだろう」（p. 65）と述べている。

このパネルセッションでは、狭義の AJ 研究が多いことを指摘しながら、広義の AJ を論じることの必要性を述べている。佐藤の「実践を通して AJ は何かを再概念化していこうとした論考が必要なのではないか」（p. 64）は、広義の AJ を論じるための 1 つのヒントと考えられる。

2.3 2020年以降のAJ研究

尹・寅丸（2021）はアカデミック・キャリア支援のためのコース開発のために、アカデミック・コンピテンシーに関する概念の精緻化明確化を目指し文献調査を行った。AJ については、各種データベースから AJ が主題、副題、キーワードのいずれかに含まれている論文を集め、本文の該当部分を確認してみた結果、日本語学習者のキャリア支援という観点から参照可能な、汎用性のある定義を見つけることはできなかった。その理由として「多くの論文が「日本留学試験」に書かれている通り「大学教育における留学生の日本語

能力」としか概念の提示をしておらず、または「大学での勉学を目的とした日本語」であると、狭義での意味としてのみ捉え、その範囲内で検討を行っていたからである」(p. 29)と述べている。そして、4年制大学またはそれに相当する水準の教育機関を卒業する人物が最低限身につけておくべき能力を意味する「学士力」の概念やその延長としてのキーコンペテンシーについて考察を行っている。

奥山(2022)は、グローバルな知識基盤社会で求められる汎用的能力としての学士力、AJ、CLIL⁽⁷⁾で育てる能力の重なりについて確認し、それにより、AJの指導にCLILを用いることが適当であることを明らかにしているが、AJについて、堀井(2003)と門倉(2006)を挙げ、どちらも低次思考能力だけでなく高次思考能力を含めてAJとしていると指摘している。そして、AJを「日本語でアカデミックな課題を達成する能力」と定義し、それは、1)言語、2)知識、3)思考力、4)学習スキルに分類ができ、グローバルな知識基盤社会、複言語・複文化主義、多文化共生という社会的な文脈の中で捉えると、「AJは、人と人、社会と社会を繋ぐ力になる。よって、AJを身に付けた留学生や元留学生は、自らの生活や人生を豊かにすることができ、日本社会の多文化共生に貢献できる」(p. 17)と述べている。また、「AJは、学士課程で身に付ける能力の入り口に相当すると、「留学生」「日本人」などと分けて考える必要はなく、共通の土台で考えていくべきことだと分かる」(p. 16)とも述べている。

これらの研究からは、大学における学士力・汎用的スキルの育成や、キャリアへの注目が高まる中、広義のAJの意義が関係づけられることが見えているのではないだろうか。

3. 考察

2024(令和6)年度の日本留学試験受験案内の日本語科目の目的には「日本の大学などでの勉学に対応できる日本語力(アカデミック・ジャパニーズ)を測定する」とある。⁽⁸⁾

森(2005)は、AJを「大学において授業(講義、演習、ゼミ、卒業研究等)をこなし単位を取得することができる日本語能力」と定義し(p. 121)、その具体的な技能として、講義・演習を聞く、ノートを取る、教科書・プリントを読む、文献を調べる、レポートを作成する、口頭発表をするなどのスキルを挙げている。

これまでのAJ研究を概観し、理念に関するとと思われるものを取りあげてきたが、AJについては、留学生を対象とした、講義を聞く・文献を読む・レポートを書く・発表をするなどのスキルを中心とする狭義のAJと日本人学生も含めた言葉の教育とする広義のAJが並行してあると言えよう。CiNiiやAJジャーナルの内容分析からは、狭義のAJ研究がほとんどであった。しかし、AJ黎明期の研究は、広義のAJの大学教育における理念を問うものであった。また、木下他(2013)においても、広義のAJに関する研究の必要性を述べており、奥山(2022)も、学士力との関連で広義のAJに言及している。

堀井(2023)は、AJ教育とビジネス日本語教育のアーティキュレーション(接続)が大学の学士課程教育において有する可能性を検討している。AJ教育においては、先行研究の分析、質問紙調査の結果から、その核心が論理的思考・批判的思考を用いた問題発見解決能力であることを浮き彫りにし、ゼミにおけるAJ教育実践における学習者の振り返り記述の縦断的分析結果からそれ等が涵養される可能性を明らかにした。AJ教育の意義は、大学教育における「ことばの教育」として論理的思考・批判的思考を用いた問題発見

解決能力である活動・能力 (Activity-Ability) の育成にあり、AJ が学士課程教育における広義の言語教育に資するためには、具体的項目 (知識・スキルなど) の学習だけではなく、主体的な活動によって涵養され具体と抽象を橋渡しする活動・能力 (Activity-Ability) の習得が必要である、と結論付けている。一方、現状では、留学生の日本語科目として、または、初年次教育として日本語リテラシーなどの形で日本人学生を含め AJ が学ばれていることが多いが、日本語科目や初年次教育科目担当者が専門教育を担当することが少ないこともあり、専門教育に移るところで学んだ AJ が継続されず、ゼミなどで本格的に必要となる3年次には忘れられていることが多い。しかし、実践結果からゼミなどの専門科目で AJ を取り入れることで日本人学生・留学生双方にとって意義があることを述べている。大学教育の中で卒業論文や卒業研究が課されていることが多いが、その執筆と重ねて AJ 教育が導入されていくことも提案している。

小笠 (2021) は、音楽を専攻し、日本語を学ぶ大学留学生を対象に、音楽大学の授業により積極的に参加していくことを目的として行った AJ 教育の事例を報告しているが、振り返りシートの内容、「言葉の定義」の文章、音楽解説の結果から、学生が授業中に互いの発表を聞き、何らかの刺激を受けていること、授業中の事前課題で示した自分の考えを中心に、調べたことを加えて発表 (提出) 内容を形成していることがうかがえるとしながら、「AJ の理論的背景となる「論理的、批判的、分析的視点」を形成する学習者間のやり取りには、相互の働きかけが重要であり、本実践はそれには至っていない」と述べている (p. 148)。深澤・深川 (2020) も、AJ の指導を行い、かつ大学教育の中で重視されるパブリックスピーキング能力を育成しながら21世紀を生きるために必要とされるスキルも同時に経験することを実現できる実践活動について報告しているが「アクティブラーニング型の活動を行うのには時間がかかり、従来と同じ授業項目を扱わなければならないとすると工夫が必要となってくる。」 (p. 71) と述べている。山本 (2003) は、AJ について、日本語科目だけでなく専門科目でも引き続き言語能力を伸ばしていけるような大学全体の教学体制を整える必要性について述べているが、AJ を「専門科目でも引き続き伸ばしていく」 (p. 83) という点に注目したい。これらから、広義の AJ 教育の可能性と AJ 教育の大学教育内の時間をかけたアーティキュレーションの必要性がみられるのではないだろうか。

堀井 (2023) では、AJ 担当教員17名への質問紙調査を行っているが、AJ 教育の課題として、AJ 教育を理解していない教員が担当している、論文が書けてもレポート・論文の書き方の指導ができるとは限らない、教員間で AJ の共通認識が持てない、専門教育との協働が難しい、など担当者の課題を挙げている。広義の AJ を実現しようとするアクティブラーニングが必要となることにも留意がいることがわかる。

4. おわりに

1 章冒頭に挙げた「資料」にある「学部等の基礎科目」については大学の学部や専攻によって異なるが、外国語、情報、健康科学、初年次ゼミ、そして、社会・人文・自然科学の科目などが相当することが多い。また、「初年次教養科目」というカテゴリーはあまり掲載がないが、「初年次教育科目」には日本語リテラシーが見られる。しかし、これらは日本人学生と共習の場合が多く、「大学において日本語で行われる講義や研究指導の内容を解するに足る日本語能力 (N2 相当) を備えていない留学生に対して実施される日本語

の教授は、法における「日本語教育」に該当するものと判断される。」(p. 19) ⁽⁹⁾とは、ずれがあるのではないだろうか。

これらから、「資料」の「AJ 科目」は狭義の AJ である「講義を聞く・文献を読む・レポートを書く・発表をする」などのスキル取得を「目指す」日本語科目ということになり、留学生別科や日本語予備教育における学習者対象の科目になると思われる。

一方、「大学での勉学に対応できる日本語力」を「大学の勉学に必要な（日本語/言語）力」として学士力に重なるものと考え、広義の AJ がそれに相当する部分があると言えよう。

根本他（2023）による AJ 教材の紹介には、「自分の持てる日本語力を駆使して、分析的・批判的に考え、論理的な意見を述べられるようになることを目指します。人文・社会・自然科学からバランスよく選定したトピックが知的好奇心を刺激。精読・速読・聴解活動で背景知識を活性化しつつ、発表・ディベート・意見文などのアウトプットを通して、高い思考力と発信力を養います。」⁽¹⁰⁾とあるが、この知識・スキル・問題発見解決力の育成を含むと考えられる内容は留学生だけでなく、本稿冒頭で取り上げた大学生の「言語運用能力の涵養に繋がる」ものではないだろうか。そして、これは広義の AJ といえるのではないだろうか。

留学生対象の日本語教育の中から生まれたAJではあるが、AJ研究黎明期から、日本人学生を含めた大学教育、さらには市民の日本語教育の中で実践されるものと捉えられていた。

AJの理念には、学士力やキーコンピテンシーにつながるスキル以上のものが含まれていると考える。そして、AJ教育において、「日本語教師が、日本語を総合的にとらえられる（教育内容）、インタラクティブ（相互作用）な教授法に習熟している（教育方法）、異文化間コミュニケーションをふまえる（教育姿勢）の3点において優れている」（門倉2006、p. 14）という点は注目できることではないだろうか。

AJ研究のこれまでを概観してきたが、AJの理念構築のためには、狭義のAJ教育だけでなく、広義のAJ教育の可能性を検討し、AJ教育とその研究が何を旨とするのかを探るさらなる実践研究が生まれることを期待したい。

なお、今回手に入らなかった貴重な文献もあるのではないかと考える。それらの不足点についてはご指摘いただければ幸いである。

（堀井恵子ほりいけいこ・元武蔵野大学・k_horii@ep.musashino-u.ac.jp）

注

1. <https://elaws.e-gov.go.jp/document?lawid=505AC0000000041_20240401_000000000000>（2024年1月20日閲覧）
2. <https://www.bunka.go.jp/seisaku/kokugo_nihongo/kyoiku/pdf/93982902_01.pdf>（2024年1月20日閲覧）
3. <http://academicjapanese.jp/dl/agreement_2023.pdf>（2024年1月20日閲覧）
4. 2024年1月20日時点のCiNiiにおけるAJをキーワードとする論文にはAJではない文献が相当数混じっていたため問い合わせをして、調査をしてもらっている。
5. <<https://www.jasso.go.jp/ryugaku/eju/index.html>>（2024年1月20日閲覧）
6. <<http://academicjapanese.jp/ajj.html>>（2024年1月20日閲覧）

7. Content and Language Integrated Learning の略で内容と言語を統合した学習方法
8. <https://www.jasso.go.jp/en/ryugaku/eju/examinee/_icsFiles/afielddfile/2024/01/26/2024eju_bulletin_jp_1.pdf> (2024年2月7日閲覧)
9. <https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/nihongokyoiku_kikan_nintei_wg/wg_05/pdf/93965201_08.pdf> (2023年12月22日閲覧)
10. <<https://store.jtpublishing.co.jp/pages/j-peak>> (2024年6月9日閲覧)

参考文献

- 小笠恵美子 (2013) 「AJ の実践報告」(パネル: 木下謙朗・佐藤正則・小笠恵美子・武一美「日本語教育の多様化とアカデミック・ジャパニーズの理念の広がりーアカデミック・ジャパニーズの過去・現在・未来ー」) 『2013 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』, 64-65.
- 小笠恵美子 (2021) 「音楽を専門とする留学生のためのアカデミック・ジャパニーズ教育の試み」 『昭和音楽大学研究紀要』 4, 136-149.
- 奥山貴之 (2022) 「CLIL によるアカデミック・ジャパニーズ指導についての研究: 背景と概念の再確認と開発した教材について」 『沖縄国際大学日本語日本文学研究』 26(2), 1-38.
- 門倉正美 (2001) 「日本留学試験のねらいと問題点ー「日本留学試験」の「最終報告書」を読む」 『横浜国立大学留学生センター紀要』 8, 93-112.
- 門倉正美 (2006) 「〈学びとコミュニケーション〉の日本語力 アカデミック・ジャパニーズからの発信」 門倉正美・筒井洋一・三宅和子 (編) 『アカデミック・ジャパニーズの挑戦』 ひつじ書房, 3-20.
- 門倉正美他 (2003) 『日本留学試験とアカデミック・ジャパニーズ (1) 日本留学試験が日本語教育に及ぼす影響に関する調査・研究ー国内外の大学入学前日本語予備教育と大学日本語教育の連携のもとにー』 平成 14 年度~16 年度 科学研究費補助金基盤研究費 (A) (1) 課題番号 14208022 研究成果報告書 平成 15 (2003) 年 10 月
- 門倉正美他 (2005) 『日本留学試験とアカデミック・ジャパニーズ (2) 日本留学試験が日本語教育に及ぼす影響に関する調査・研究ー国内外の大学入学前日本語予備教育と大学日本語教育の連携のもとにー』 平成 14 年度~16 年度 科学研究費補助金基盤研究費 (A) (1) 課題番号 14208022 研究成果報告書 平成 17 (2005) 年 3 月
- 門倉正美・筒井洋一・三宅和子編 (2006) 『アカデミック・ジャパニーズの挑戦』 ひつじ書房
- 木下謙朗 (2013) 「AJ 理念の構築」(パネル: 木下謙朗・佐藤正則・小笠恵美子・武一美「日本語教育の多様化とアカデミック・ジャパニーズの理念の広がりーアカデミック・ジャパニーズの過去・現在・未来ー」) 『2013 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』, 59-61.
- 佐藤正則 (2013) 「AJ 理念の問題点と可能性」(パネル: 木下謙朗・佐藤正則・小笠恵美子・武一美「日本語教育の多様化とアカデミック・ジャパニーズの理念の広がりーアカデミック・ジャパニーズの過去・現在・未来ー」) 『2013 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』, 61-64.

- 根本愛子・ボイクマン総子・藤井明子（2023）『東京大学教養学部のアカデミック・ジャパニーズ J-PEAK 中上級』ジャパントタイムズ出版
- 深澤のぞみ・深川美帆（2020）「学部留学生対象のパブリックスピーキング能力を育成するための実践活動」『金沢大学国際機構紀要』2, 61-73.
- 堀井恵子（2003）「留学生が大学入学時に必要な日本語力は何かー『アカデミック・ジャパニーズ』と『日本留学試験』の『日本語試験』を整理する」門倉正美代表『日本留学試験とアカデミック・ジャパニーズ』平成14～16年度科学研究費補助金（基盤研究（A））（1）一般）研究成果中間報告書, 113-122.
- 堀井恵子（2023）『学士課程教育におけるアカデミック・ジャパニーズ（AJ）・ビジネス日本語（BJ）教育の意義と課題』[未公刊博士論文] 放送大学大学院
- 森朋子（2005）「大学教育における『アカデミック・ジャパニーズ』を考える」『東京家政学院大学紀要』45, 117-122.
- 山本富美子（2003）「留学生に求められる日本語能力と大学学部教学体制の国際化」『日本留学試験とアカデミック・ジャパニーズ』, 73-83.
- 尹智鉉・寅丸真澄（2021）「早稲田大学の日本語学習者が育むべき『アカデミック・コンピテンシー』とは何か」『早稲田日本語教育実践研究』9, 27-33.